

ハンガリーのお笑い芸人 ナジ・バンドー・アンドラーシュ 4
～「コツカ通り十三番地～とある十階建ての高層団地の生活」～

飯田 縁

「コツカ通りの雨漏り」と「コツカ通り十三番地—砦ゴキブリ七十七」に続いて、同じくコツカ通りシリーズから「コツカ通り十三番地～とある十階建ての高層団地の生活」をお送りする。前の「砦ゴキブリ」が「団地暮らしは楽しいな、♪ラララ～」だったとすると、こちらは「団地生活のご近所づきあい、その内幕」か。前作では、団地暮らしでは食事もみんな一緒、フレンチ・トーストを作っているとお隣さんが顔を出す、ダイエット中でお腹がすいていたからという箇所があったが、ダイエット中というのは実は悲しき見栄で、ほんとは団地にたどりつくまで、いかに食べるものもけずって切り詰め、そしてたどりついてからも節約しているんだ、という内実だったことがわかる。学生に部屋を又貸しして、自分は台所に住んでいる、というおじさんもでてくる。

マジャール・ラジオで出している「ユーモア・フェスティバル八十二」という、その年のお笑いネタの傑作選テープに収録された作品だが、これは磨きあげられて短くなった上演版で、一九八六年に出版された彼の著作「路上一路傍にて」を読むと、最初はもっと長いものだったことがわかる。付録として原版のほうも訳出したので、興味のある方だけどうぞ。削られた部分を読むと、内容がわかりやすくなると思う。枠で囲んだのが削除された部分。

訳者の個人的な体験をひとつ。これを訳していて、訳者がブダペストに滞在していたとき、部屋を借りた大家さんの奥さんのことを思い出した。彼女はナジ・バンドーのネタについて「団地住まいの夫婦が深夜に交わす会話」を聞いたけど、それはとても美しいものだった」と語っていた。大家さんご夫妻はすでに亡くなられたので、どのネタのことか確かめようがないのが残念なのだが、この作品ではないかと思う。最後に登場する老漁師夫婦のくだりだ。収穫なしで帰ってきた老漁師は、人間の言葉を話す黄金の魚を放してやったと語る。妻が「朝になったらもどって、黄金の魚に頼んでこい」と願ったものは……。

おとぎ話では強欲ばばあだが、ここでの彼女は威厳があって美しい。

とある十階建ての高層団地の生活（上演版）

はるかなる貯水池のかなた、都市開発局所有の深い森を越えたところ、短いしっぽの土方が掘り返しているところ、そこにコツカ通り十三番地がある・・・

その家からは森は見えない！・・・

切り払われてしまったのだ！・二十一の森全てが！

ここには秋がない、ここには落ち葉がない、ある雨の日に郵便配達屋がつんのめることでもないかぎり・・・（訳注 ハンガリー語では「葉」と「手紙」を表す言葉は同じ“level”）

ここで鳥の声が聞こえるのは、どこかの家でカッコー時計の音が鳴り響くときだけ！・・・

十階建ての高層団地・・・三十世帯が入っている・・・

彼らのうち一人として架空の人物ではないし、もし誰かに似ていたとしても、偶然の産物ではない！

彼らは、盛大に鼻をすすりながら骨から骨髓をすすりこんでいるのは誰か、ズルズル食っているのは誰か、大きなスプーンで食べているのは誰か、ほとんど食べていないのは誰かわかっている・・・

ここに引っ越してきた者は、何年もの間ろくに食べていないからである・・・

そしてもしここに越してくると、何年もの間ろくに食べられないのだ！・・・

住居申し込み書

姓名（コムソール団員でなければ、洗礼名も！・・・）

堅信礼を受けていますか？かつてお祈りしたことがありますか？（もしあるなら、なぜ住まいを神様に頼まなかったのですか？・・・）

現在の住まい（もし下宿なら、そのぶったくり屋の名をあげてください！もしブタ小屋なら、下宿人は何人いますか？・・・）

政府からの表彰、大臣からの表彰、課長から賞賛されたことは、肩をたたかれたことは？（もしどれもなければ、何回懲罰を受けましたか？）

現在のあばら屋の全データ（床面積—もしあるなら・・・窓は何個？・・・ガラスははまっていますか？・・・なければ、この項目ペンで消してください！）

トイレはありますか？幾つ？・・・共同トイレですか？

どんな住まいがほしいですか？（この欄は、住居管理局の記入専用！・・・）

驚嘆すべきは朝である！

十階では四時頃、一階では六時頃に陽がのぼる・・・

家々の間にオレンジ色のゴミ収集車が姿を現す、後ろには国民たちがぶらさがっている……

車はスピードを落とし、人々は飛び降り、ゴミバケツを見て彼らの一人が叫ぶ「また誰か、俺たちのパンのいいところを先に食っちまってるぞ！」

家じゅうが目覚める……

そしてこのとき大騒ぎが始まる、ラジオが、朝の音楽番組が、ニュースが響き、それが住人たちの騒音と混じりあう！

ラジオ「……国境では捕虜交換が進んでいます……」

パパ「ママ、来てくれ！……このろくでなしのガキめ、またバスルームに閉じ込めやがった！」

ラジオ「……オペックはさらに石油料金を値上げしています……」

ママ「坊や、イライラさせないで！……また何のために十フォリントいるの？……あんたのアホな担任は何を考えてるの、私たちが百万長者だとでも？」

ママ「坊や、ラム入りのお茶をすすらないの……幼稚園でもそんな風に食べてるの？」

子供「ママ、学級担任の不合格通知表にサインしてくれる？」

ママ「まあなんてことなの！……今年はまだ六度めじゃないの！……」

子供「うん、あと六枚の方には自分でサインしておいたよ……」

ラジオ「……最近のデータによればアルコール中毒の分野では……」

妻「それじゃあんた、どうして朝にならないと帰って来ないの！……飲んでばかりで、愛することだって出来やしないじゃない！あんた一体どうなっちゃったの？……廃品ゴミ捨て場？」

八時以降、家の前の遊園地に最初の国営銀行世代の子供たちが現れ、遊び始める……

今や一人の丸ぼちゃを母親が抱えて降りてくる、足にはローラースケート。

彼女は子供を歩道に下ろすと、壁によりかからせる……

八時半になるともうおしゃべりが始まる……

「ハロー、君ら夕べの映画見た？」

「あの野郎のところまではね。終わり頃にはもう寝ちゃった……なんであれが

「十八歳未満禁止なのかだけはわからなかった」

「少なくともキスはしてたろ？」

「うん、野郎二人でね！・・・」

「やつら砂場に来てるか？」

「離婚家庭んちの子供とかい？」ほんとにしないかもしれないけど、この親たちの何人かはふざけた連中だけ・・・ここの外にいるときの彼らを観察してごらん！

「可愛い坊や！・・・妖精のワンちゃん！・・・ぼろぼろ坊っちゃん！・・・砂糖菓子の可愛い子ちゃん！・・・お洋服がしわくちゃにならないように気をつけてね！・・・そして汚くなるから砂場には入らないでね！・・・そして他の人が席をつめなくてもいいように、ベンチに坐ってちょうだい！・・・でも木馬には乗らないでね、落ちるから！・・・走らないでね、転ぶから！・・・テュンディ・ビュンディ、サボーおじさんにちゃんとご挨拶なさい！・・・うちの子はもうトイレに一人で坐れるわよ！・・・お宅のお子さんは？」

こいつら一体、何を考えているんだろう？・・・われわれが二人でトイレに坐るほど、アホだとでも？

だが上の住まいでだとどうなるか、そこにいるときの彼らのことも観察してみよう！

「もう手を洗いに行きなさい！・・・またなんて眼つきしてるの、このろくでなし！・・・ぶち返すんじゃない！・・・「サボーおじさんが来たら、挨拶しに来なくてすむように、遊びに行きなさい」ってもう何度言ったかわからないわよ。あんたはどんな人間になるのやら！・・・」

やれやれ本当にガキどもときたら・・・こいつらどんな人間になるんだろう？・・・

コツカ通りの午前はかくて過ぎてゆくが、しばしばこれ以外のかげ口の種も生ずる・・・

ほとんど全階全員に！

僕は君がうらやましい・・・君は僕がうらやましい・・・彼は僕がうらやましい・・・僕らは君らがうらやましい・・・君らは彼らがうらやましい・・・彼らは僕らがうらやましい・・・

僕はノーマルだ・・・君はノーマルだ・・・彼はノーマルではない！・・・

僕は、誰が幾ら稼いでいるかに興味はない・・・

君は、どうして僕が幾ら稼いでいるかに、興味があるんだ！

僕は君の奥さんと、ハハハ！
君は彼の奥さんと、ハハハ！
彼は僕の女房と！・・・ウヘ～！

僕は車がある・・・君にも車がある・・・ 彼らは、逆立ちしたって車はできない！
僕らは毎日自分の車を洗う・・・
彼らは毎日自分の子供たちを洗う・・・

午後リラックスした人々が毎日の（でもない）仕事から帰ってくる。それではそのうち何人かと面識を得るとしよう！

一階一号室 ムンカーシュ家

「どうぞお入りください！・・・私たちは小数派なんです・・・むしろ入らないでください！・・・ここにお客様を迎えるのは無理なんですよ・・・前に母たちが来たんだけど、ここで寝ることは出来ないんで、私たちの方が寝るために母のところに出かけたんです！」

四階十二号室 アドーシュ（税金）家

何のために来たか、言わないでくださいよ、当ててみせるから！・・・電気料金？・・・水道料金？・・・ガス料金？・・・ラジオとテレビ料金？・・・新聞代？・・・保険料金？・・・住居税？・・・お家賃？・・・まさか差し押さえの執行史じゃないでしょね？・・・そのどれでもないって？・・・それじゃ僕、今日は何とかのりきったぞ！・・・」

五階十三号室 ディスノー（ブタ）家

「だれだい？・・・呼び鈴を鳴らしたのはあんた？・・・わしらが食事中なのが聞こえなかった？・・・わしらはいつだって何か食べてるのさ・・・いつどうしたのかって！・・・女房が・・・三食コース付なのさ！・・・そうともあいつもデブだよ！・・・一度台所につまって抜けなくなったんだ！・・・でもそこが好きなのさ！・・・朝目が覚めて、右に手を伸ばすとそこにも女房、・・・左に手を伸ばすと、そこにも女房さ！」

五階十五号室 ペダンシュ家

「靴を脱いでお入りになって！・・・小さい家だけどすごくきちんとしているの！・・・入り口の部屋には市松模様のカーペットを敷いたわ、カーペットには幾何学模様の敷物を、そのカバーには保護カバーを、保護カバーにはほこりよけを、でもそれにだって靴をはいたままではあがらないのよ！・・・ソファには保護カバーをかけたわ、保護カバーにはカバーを保護するカバーを・・・家では開いた窓にもカバーがかかっているの！・・・子供部屋もきちんとしているわ！・・・子供たちにはお隣さんで遊ぶように、しつけてあるのよ！・・・」

六階二十号室 ガラーシュ家

「私は台所に住んでいるんだ・・・部屋のほうは男子大学生二人に貸してる・・・やつらは一人あたり千五フォリント払ってるから、そうさな、三フォリント・・・このほかにもわしは五フォリントかせいでるから、八フォリントになる！・・・女を連れ込むのは禁止！二人であることをありがたく思うことだね！・・・」

十階三十号室 ポジティブ家

「同志、私たちはこの十階にあの「十階」(訳注 残念ながら意味不明、映画か芝居の題名か?)で上演された通りに暮らしています！・・・」

夕方ころガキどもは再び一緒にいる、そして新たにおしゃべりが始まる。

「本当だってば！・・・僕のパパは働いてるし、そのせいで尊敬されてるんだぞ！」

「そんなの当たり前だよ！・・・僕のパパだって給料とってるさ！」

「僕のパパはすごくいい人だぞ！」

「知ってるよ！・・・四年前まではまだ僕のパパだったんだから！」

「僕のおばあちゃんは農家風のタイルのストーブがついたきれいな大きな家を持つてるんだぞ！」

「僕のおばあちゃんには立派な社会主義祖国と四人の大きな農夫の息子がいるよ・・・」

すっかり暗くなった

最後の子供も家に帰りつくときには、すでに誰もが床についている、そして父親がどなりつける。

「坊主！、今にならないと帰ってこれないのか？・・・人生を何だと思っているんだ、え？・・・わしらがどんな風に暮らしてきたか、お前に何がわかる？・・・」

わしらの時代には白パンはまだぜいたくだったし、つぎ当てなしのブーツはステータス・シンボルだとみなされたんだ。ピオネールの授業が終わるまで、わしらはほとんど待ってないで、すぐ聖書研究の授業に急いだんだ！・・・わしらは畑だって耕したし、種まきもした・・・十字も切った！・・・わしらこそ、最初に少年鼓手の手ほどきを受けた世代で、そして多分最初で最後の犠牲者でもある・・・かけ算九九と信仰の信条を同時になったんだ・・・あのころはまだ九九を暗記しなくてはならなかったからだ！・・・わしらは、たたきおこされたときだって、すらすら暗唱してみせたさ！・・・実際たたきおこされていた年があったんだ・・・だがわしらはすらすら言ったものさ「八かける七は五十六！」と・・・決して覚えたりしなければ良かったろうに！・・・

わしらはまだ地下通路でぼんやりしていたことがない、なかったんだから！・・・

そして一晩中ディスコでおしゃべりしたことなんかない、なんせなかったんだから！・・・

そして金のために頭がいかれたことなんかない、なんせ一フォリントもなかったんだから！

だがあのころはまだ汚れを知らぬ少女たちが学校にいたんだぞ！・・・

そしてわしらだって入学したんだ！・・・

そしてわしらは九時にはもう寝なくてはならなかった！・・・十時に家に着くようにな！

そしてお前ときたら！・・・夜の十時に帰ってきて、「曇りだ」とも言わずに雲隠れしてしまう！・・・」

「なんでさ？俺、お天気キャスターかい？・・・」

「これだ！・・・もう寝に行け！・・・いっちまえ！」・・・見上げた親父さんだ！

はるかかなたの貯水池の岸辺から漁師さんが空手で帰宅したときは、真夜中近い。

「ばあさんや！・・・一尾の言葉を話す魚を捕まえたんだが、放してくれと頼むので、放してやったんだよ・・・」

「おじいさん、あんた頭がおかしいのかい？・・・言葉を話す金の魚を放してやったって？・・・朝になったらすぐ引き返して、私らのためにただの倒れかけの小屋を頼むんだよ、そこならやっとな静けさと沈黙が見つかるんだからね！・・・」

付録

とある十階建ての高層団地の生活（原型版）

はるかなる貯水池のかなた、都市開発局所有の深い森を越えたところ、短いしっぽの土方が掘り返しているところ、そこにコツカ通り十三番地がある・・・

その家からは森は見えない！・・・

切り払われてしまったのだ！・二十一の森全てが！

ここには秋がない、ここには落ち葉がない、ある雨の日に郵便配達屋がつんのめることでもないかぎり・・・
（訳注 ハンガリー語では「葉」と「手紙」を表す言葉は同じ“level”）

ここで鳥の声が聞こえるのは、どこかの家でカッコー時計の音が鳴り響くときだけ！・・・

十階建ての高層団地・・・三十世帯が入っている・・・

彼らのうち一人として架空の人物ではないし、もし誰かに似ていたとしても、偶然の産物ではない！

彼らは、盛大に鼻をすすりながら骨から骨髓をすすりこんでいるのは誰か、ズルズル食っているのは誰か、大きなスプーンで食べているのは誰か、ほとんど食べていないのは誰かわかっている・・・

ここに引っ越してきたい者は、何年もの間ろくに食べていないからである・・・

そしてもしここに越してくると、何年もの間ろくに食べられないのだ！・・・

住居申し込み書

姓名（コムソール団員でなければ、洗礼名も！・・・）

堅信礼を受けていますか？かつてお祈りしたことがありますか？（もしあるなら、なぜ住まいを神様に頼まなかったのですか？・・・）

現在の住まい（もし下宿なら、そのぶったくり屋の名をあげてください！もしブタ小屋

なら、下宿人は何人いますか？・・・）

その場所にはどんな資格で住んでいますか？（契約したか一時停泊か）

家族の状況（該当するものに下線を引いてください、妻あり、伴侶関係、嘆かわしい）

職業、働いていますか、いつから？

管理職にあるなら、誰から任命されたのですか？

仕事上の仲間はいますか？どこかの店の会員ですか？

社会的な任務を負っていますか？（もしないなら、どうしてですか？・・・もしあるなら、どうして教会に通っていたのですか？）

月収は？（正規の職業から、^{アルバイト}副業から、兼業から、殺し屋業から）

政府からの表彰、大臣からの表彰、課長から賞賛されたことは、肩をたたかれたことは？（もしどれもなければ、何回懲罰を受けましたか？）

ご家族内に身体障害者はいらっしゃいますか？ご家族の中で精神病の方はいらっしゃいますか？（いないのなら、今からなるからです！）

結婚相手の、結婚相手たちの名（もし女性なら、旧姓も！）

いつから一緒に暮らしていますか？（一生ですか？そしてそれはそもそも生活といえますか？・・・）

結婚相手はどんな資格で現在の住まいに住んでいるのですか？（扶養者、おっばい保持者（^{訳注}ハンガリー語のブラジャー）、自発的に引っ越してきた者、たかりのメス犬、家族の一員、受益権の持ち主でそれを享受している者）

現在のあばら屋の全データ（床面積—もしあるなら・・・窓は何個？・・・ガラスははまっていますか？・・・なければ、この項目ペンで消してください！）

トイレはありますか？幾つ？・・・共同トイレですか？

暖房方法（ガス暖房、セントラル・ヒーティング、家が燃える）

その住まいはどんな目的に一番適していますか？（人間の居住、動物の居住、両方一緒）

どんな住まいがほしいですか？（この欄は、住居管理局の記入専用！・・・）

われらサインした者たちは、上記のデータが悲しき現実そのものであること、さらにわれわれがカタツムリに生まれなかったことは残念であると断言する、そしてわれわれは住まいを得るがはやいか、このあばら屋からの出発を告げるのだ。

驚嘆すべきは朝である！

十階では四時頃、一階では六時頃に陽がのぼる・・・

入り口のドアには一枚の広告が「プレハブ住宅を買いたし、料金上乘せします！」

家々の間に団地のくず拾いビュドシ叔父さんが現れる・・・

その隣をヴァコンドという名の見習いがぶらぶら歩いている、彼はコンテナの間を行ったり来たりしている。彼には臭いがしみこんでいる・・・

彼は一日二十フォリントのため、プラス三食まかないのため、これをやっている・・・

彼らは掘り返し始める・・・熟練の動作でパンを、包んだサンドウィッチ、食べ

かけのウィンナソーセージ、使いかけのソーセージ、フライを集める、やがてビュ
ドシュおじさんが口を開く

「こんなパンに値上するだけの価値はなかったな！ゴミ収集業者だって食いやし
ないよ！・・・やれやれ、生活水準はほんとにそんなに高いのかね！・・・これの
ためにわしらは深くまで手を突っ込まなくてはならんのか？・・・行こう、ヴァコ
ンド、競争相手がやってくるからな！」

家々の間にオレンジ色のゴミ収集車が姿を現す、後ろには国民たちがぶらさがっ
ている・・・

車はスピードを落とし、人々は飛び降り、ゴミバケツを見ながら彼らの一人が
叫ぶ「また誰か、俺たちのパンのいいところを先に食っちゃってるぞ！」

家じゅうが目覚める・・・

そしてこのとき大騒ぎが始まる、ラジオが、朝の音楽番組が、ニュースが響き、
それが住人たちの騒音と混じりあう！

ラジオ「・・・国境では捕虜交換が進んでいます・・・」

パパ「ママ、来てくれ！・・・このろくでなしのガキめ、またバスルームに閉じ込
めやがった！」

ラジオ「・・・オペックはさらに石油料金を値上げしています・・・」

ママ「坊や、イライラさせないで！・・・また何のために十フォリントいるの？・・・
あんたのアホな担任は何を考えているの、私たちが百万長者だとでも？」

ラジオ「・・・ザンジバルの農林大臣がなくなりました。首相は敬意を表して国葬
を考えています・・・」

ママ「坊や、ラム入りのお茶をすすらないの・・・幼稚園でもそんな風に食べてる
の？」

子供「ママ、学級担任の不合格通知表にサインしてくれる？」

ママ「まあなんてことなの！・・・今年はもう六度めじゃないの！・・・」

子供「うん、あと二枚の方には自分でサインしておいたよ・・・」

ラジオ「・・・そして児童衛生検査が示しているのは、ますます・・・」

ママ「パパ！・・・子供がよだれをたらしてるわ、どうしたらいいの？」・・・

パパ「どうしたらいいか、もう言ったぞ！・・・やつの口にスポンジを入れるんだ！」

ママ「パパ、子供がぬれた砂を食べちゃったわ、どうしましょう？」

パパ「やつの目の前でセメントを積んでやれ！」

ラジオ「・・・最近のデータによればアルコール中毒の分野では・・・」

妻「それじゃあんた、どうして朝にならないと帰って来ないの！・・・飲んでばかりで、愛することだって出来やしないじゃない！あんた一体どうなっちゃったの？・・・廃品ゴミ捨て場？」

ラジオ「ハンガリー男性社会の古き闘士ファルカシュ・デーネシュが夜間、男性の義務の遂行中に命を落としました。女性審議官は彼の死に弔意を表し・・・」

妻「ちょっとパパ！・・・子供たちの前で脱がないでって、前にも言ったでしょう！・・・」

亭主「俺には隠さなくちゃならんものはないんでね！」

妻「問題はそこなのよ、ベイビー！」

八時以降、家の前の遊園地に最初の国営銀行世代の子供たちが現れ、遊び始める・・・

今や一人の丸ぼちやを母親が抱えて降りてくる、足にはローラースケート。

彼女は子供を歩道に下ろすと、壁によりかからせる・・・

八時半になるともうおしゃべりが始まる・・・

「ハロー、君ら夕べの映画見た？」

「あの野郎のところまではね。終わり頃にはもう寝ちゃった・・・なんであれが十八歳未満禁止なのかだけはわからなかった」

「少なくともキスはしてたろ？」

「うん、野郎二人でね！・・・お母さんは、 Hentai たちだっていった・・・」

「Hentai だって！・・・僕はそんなやつら相手にしないぞ！・・・やつら砂場に來てるかい？」

「離婚家庭んちの子供とかい？」

「生意気言うなよ！・・・君だって、お父さんが食料倉庫で蜜をたらしたとき初めて、お父さんができたんじゃないか！」

「あんたたち、静かになさい！」ほんとにしないかもしれないけど、この親たちの何人かはふざけた連中だぜ・・・この外にいるときの彼らを観察してごらん！

「可愛い坊や！・・・妖精のワンちゃん！・・・ぼろぼろ坊ちゃん！・・・砂糖菓子の可愛い子ちゃん！・・・お洋服がしわくちゃにならないように気をつけてね！・・・そして汚くなるから砂場には入らないでね！・・・そして他の人が席をつめなくてもいいように、ベンチに坐ってちょうだい！・・・でも木馬には乗らないでね、落ちるから！・・・走らないでね、転ぶから！・・・テュンディ・ビュンディ、

サボーおじさんにちゃんとご挨拶なさい！・・・うちの子はもうトイレに一人で坐れるわよ！・・・お宅のお子さんは？」

さてこいつら、何を考えているんだろう？・・・われわれが二人でトイレに坐るほど、アホだとでも？

だが上の住まいでだとどうなるか、そこでの彼らのことも観察してみよう！

「もう手を洗いに行きなさい！・・・またなんて眠つきしてるの、このろくでなし！・・・ぶち返すんじゃない！・・・「サボーおじさんが来たら、挨拶しに来なくてすむように、遊びに行きなさい」っってもう何度言ったかわからないわよ。あんたはどんな人間になるのやら！・・・」

やれやれ本当にガキどもときたら・・・こいつらどんな人間になるんだろう？・・・

コツカ通りの午前はかくて過ぎてゆくが、しばしばこれ以外のかげ口の種も生ずる・・・

ほとんど全階全員に！

僕は君がうらやましい・・・君は僕がうらやましい・・・彼は僕がうらやましい・・・
僕らは君らがうらやましい・・・君らは彼らがうらやましい・・・彼らは僕らがうらやましい・・・

僕はノーマルだ・・・君はノーマルだ・・・彼はノーマルではない！・・・

僕は、誰が幾ら稼いでいるかに興味はない・・・

君は、どうして僕が幾ら稼いでいるかに、興味があるんだ！

僕は君の奥さんと、ハハハ！

君は彼の奥さんと、ハハハ！

彼は僕の女房と！・・・ウへ～！

僕は車がある・・・君にも車がある・・・ 彼らは、逆立ちしたって車はできない！

僕らは毎日自分の車を洗う・・・

彼らは毎日自分の子供たちを洗う・・・

午後リラックスした人々が毎日の（でもない）仕事から帰ってくる。それではそのうち何人かと面識を得るとしよう！

一階一号室 **チョコレート家**

「われわれは多数派だ！」

二階四号室 **キライ家**

「権力は労働者たちのものよ！・・・でも私は彼をこき使ってやるの・・・」

二階五号室 **ムンカーシュ家**

「どうぞお入りください！・・・私たちは小数派なんです・・・むしろ入らないでください！・・・ここにお客様を迎えるのは無理なんですよ・・・前に母たちが来たんだけど、ここで寝ることは出来ないんで、私たちの方が寝るために母のところに出かけたんです！」

三階九号室 **ポール家**

「ようこそ！・・・ドアマットをどうぞ！・・・私は学校には四学年行っただが、耕作期間の間、残りの四学年行かなかったということじゃないんだ、本当だよ！・・・結婚もしたし・・・女房だって四学年行ってるし、そんなわけで例えば映画館にだって一緒に行けるよ！・・・住まいは大きすぎるといってもないが、動物を飼っているんだ！・・・この台所には三匹の子豚の場所があるんだ・・・僕らは劇場にだって行ってるよ・・・残りものをもらいにね！」

四階十二号室 **アドーシュ（税金）家**

何のために来たか、言わないでくださいよ、当ててみせるから！・・・電気料金？・・・水道料金？・・・ガス料金？・・・ラジオとテレビ料金？・・・新聞代？・・・保険料金？・・・住居税？・・・お家賃？・・・まさか差し押さえの執行史じゃないでしょね？・・・そのどれでもないって？・・・それじゃ僕、今日は何とかのりきったぞ！・・・」

五階十三号室 **ディスノー（ブタ）家**

「だれだい？・・・呼び鈴を鳴らしたのはあんた？・・・わしらが食事中なのが聞こえなかった？・・・わしらはいつだって何か食べてるのさ・・・いつどうしたのかって！・・・女房が・・・三食コース付なのさ！・・・そうともあいつもデブだよ！・・・一度台所につまって抜けなくなったんだ！・・・でもそこが好きなのさ！・・・朝目が覚めて、右に手を伸ばすとそこにも女房、・・・左に手を伸ばすと、

そこにも女房さ！」

五階十五号室 ペダンシュ家

「靴を脱いでお入りになって！・・・小さい家だけどすごくきちんとしているの！・・・入り口の部屋には市松模様のカーペットを敷いたわ、カーペットには幾何学模様の敷物を、そのカバーには保護カバーを、保護カバーにはほこりよけを、でもそれにだって靴をはいたままではあがらないのよ！・・・ソファには保護カバーをかけたわ、保護カバーにはカバーを保護するカバーを・・・家では開いた窓にもカバーがかかっているの！・・・子供部屋もきちんとしているわ！・・・子供たちにはお隣さんで遊ぶように、しつけてあるのよ！・・・」

六階二十号室 サボ一家

ドアの黒板「ラジオ局に出かけます」

七階二十六号室 ガラーシュ家

「私は台所に住んでいるんだ・・・部屋のほうは男子大学生二人に貸してる・・・やつらは一人あたり千五フォリント払ってるから、そうさな、三フォリント・・・このほかにもわしは五フォリントかせいでるから、八フォリントになる！・・・女を連れ込むのは禁止！二人であることをありがたく思うことだね！・・・」

十階三十号室 ポジティブ家

「同志、私たちはこの十階にあの「十階」(訳注 残念ながら意味不明、映画か芝居の題名か?)で上演された通りに暮らしています！・・・確かに水道が私たちのところまで届かないのは本当です、でも流れ始めるまで待ちます・・・水が流れれば・・・窓は動かない、くつついているから・・・天井はなんとでこぼこなのかって？・・・むかし防空壕にいられたときも、私たちは喜んだものさ！・・・床板がそり返ること？・・・私たちすでに塹壕でだって走ったじゃないか！・・・ときどきエレヴェーターが故障すること？・・・そうとも！エレヴェーターはちよくちよく・・・いいじゃないか・・・もし上にあがりたければ、前をじっと見つめて上がっていくのさ！・・・家が狭いこと？・・・そうさ、狭いさ！・・・でもたくさん小さな場所にもいられる場所はあるんだよ！・・・」

夕方ころガキどもは再び一緒にいる、そして新たにおしゃべりが始まる。

「本当だったら！・・・僕のパパは働いてるし、そのせいで尊敬されてるぞ！」

「そんなの当たり前だよ！・・・僕のパパだって給料とってるさ！」

「僕のパパはすごくいい人だぞ！」

「知ってるよ！・・・四年前まではまだ僕のパパだったんだから！」

「僕のおばあちゃんは農家風のタイルのストーブがついたきれいな大きな家を持ってらんだぞ！」

「僕のおばあちゃんには立派な社会主義祖国と四人の大きな農夫の息子がいるよ・・・」

すっかり暗くなった

最後の子供も家に帰りつくときには、すでに誰もが床についている、そして父親がどなりつける。

「坊主！、今にならないと帰ってこれないのか？・・・人生を何だと思っているんだ、え？・・・わしらがどんな風に暮らしてきたか、お前に何がわかる？・・・わしらの時代には白パンはまだぜいたくだったし、つぎ当てなしのブーツはステータス・シンボルだとみなされたんだ。ピオネールの授業が終わるまで、わしらはほとんど待ってないで、すぐ聖書研究の授業に急いだんだ！・・・わしらは畑だって耕したし、種まきもした・・・十字も切った！・・・わしらこそ、最初に少年鼓手の手ほどきを受けた世代で、そして多分最初で最後の犠牲者でもある・・・かけ算九九と信仰の信条を同時にならったんだ・・・あのころはまだ九九を暗記しなくてはならなかったからだ！・・・わしらは、たたきおこされたときだって、すらすら暗唱してみせたさ！・・・実際たたきおこされていた年があったんだ・・・だがわしらはすらすら言ったものさ「八かける七は五十六！」と・・・決して覚えたりしなければ良かったろうに！・・・

わしらはまだ地下通路でぼんやりしていたことがない、なかったんだから！・・・

そして一晩中ディスコでおしゃべりしたことなんかない、なんせなかったんだから！・・・

そして金のために頭がいかれたことなんかない、なんせ一フォリントもなかったんだから！

だがあのころはまだ汚れを知らぬ少女たちが学校にいたんだぞ！・・・

そしてわしらだって入学したんだ！・・・

そしてわしらは九時にはもう寝なくてはならなかった！・・・十時に家に着くようにな！

そしてお前ときたら！・・・夜の十時に帰ってきて、「曇りだ」とも言わずに雲隠れしてしまう！・・・」

「なんでさ？俺、お天気キャスターかい？・・・」

「これだ！・・・もう寝に行け！・・・いっちなまえ！」・・・見上げた親父さんだ！

はるかかなたの貯水池の岸辺から漁師さんが空手で帰宅したときは、真夜中近い。

「ばあさんや！・・・一尾の言葉を話す魚を捕まえたが、放してくれと頼むので、放してやったよ・・・」

「おじいさん、あんた頭がおかしいのかい？・・・言葉を話す金の魚を放してやったって？・・・朝になったらすぐ引き返して、私らのためにただの倒れかけの小屋を頼むんだよ、そこならやっと静けさと沈黙が見つかるんだからね！・・・」